

高校教員その2

2020. 11. 9

気づかない人、相手のことを思いやれない人は、目配り、気配り、心配りができない。その結果、問題が生じやすくなる。しかし、その原因が自分にあるとは気づかない。気づかないから反省もしない。そして、また同じ失敗を繰り返すようになってしまう。

これから、若い先生方がどんどん増えていくことになる。これからの人たちに、気づく力、相手の立場になり、おもいやる心は備わっていくのであろうか。それとも最初から備わった状態で教員になってくるのだろうか。

心の指導は、技術の指導以上にむずかしいものである。マニュアルがあるわけではない。指導する側の人間性にかかっている。だからこそ、年長の者は日々、人間性を磨くために努力していく必要がある。

私は、コロナ禍が始まるまでは、毎月「福島国語の会」というものに参加していた。小学校部会も中学校部会も、月に1回のペースで平日の夜に会が開かれていた。ここには、福島大学の学生も参加している。学生は、教授の指導のもと、会の運営も担っている。

この学生さんたちがすばらしいのである。すでに、気を使うことも、まわりを見渡すこともできている。国語の勉強になるのはもちろんであるが、それ以上に社会に出てから役に立つことを学んでいる。

私が小学校部会に行く。受付で自分のネームプレートを探してつけるのであるが、いつも受付担当の学生さんが、私のネームプレートを取ってくれるのである。私の名前を覚えていて、そうしてくれるわけである。こちらは自然と気分がよくなる。素直に「ありがとう」という言葉が出てしまう。中学校部会に行く。やはり同じことが起きる。

この学生さんたちは、いつもグループで協議した内容をまとめて報告する役目も担っている。その報告が、これまたすばらしい。各グループで、ああだ、こうだと、好き勝手に話していることを簡潔にポイントを絞って話していく。この経験も、必ず社会に出て役立つはずである。

これからたくさんの若い方たちと一緒に仕事をするようになる。「鉄は熱いうちに打て」である。相手が、どういうタイプか、どういう言い方をすれば伝わるかを見極め、それぞれの持ち味を生かしながら育てていきたいものである。そして、大切な「心」を若い世代に継承していきたい。授業技術の継承も大切であるが、「心」の継承は不可欠である。

今回も偉そうなことを書いてしまった。現在、相手に合わせたアドバイスというものを磨いている最中である自分の力不足が、返って浮き彫りとなってしまった。熱い鉄ならば打ちようがあるが、熱くもない鉄は打ちようがない。まずは、心に灯をともしほうが先の場合もある。今までの自分の失敗経験をもとに、若手を育てながら自分も成長していきたいと思う。